

BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

30

第三六回受賞作品（一九九五年）

川西町フレンドリープラザ 後編

前編では井上ひさし氏と町の人たちとの一〇年にわたる交流がプロジェクトを実現した経緯を紹介した。後編は大切に使用されているプラザの内部空間の魅力と、打ち放しコンクリートのダイナミックな空間を仕上げた施工者の努力、地域を支えるプラザの活動を紹介する。

観客と舞台との一体感が 心に響く芝居を生む

川西町フレンドリープラザ（以下、プラザ）に入って西側の大階段を上ると、劇場ホールに着く。井上ひさし氏の戯曲を上演する「こまつ座」をはじめ、さまざまな芝居が上演される。「暗闇の空間が演劇にとっていかに大切か、井上先生が私たちに話されました」と語るのは、プラザを設計した（株）本間利雄設計事務所設計画から設計全般に携わった本間弘氏。「消防署と打ち合わせを重ね、十分な体制を整えることで、誘導灯を消し、暗闇がつくれるようにできま

した。当時、全国でも例がないと大変喜んでいただいたのが印象的でした」。舞台運営がしやすいように演劇専門家の意見も反映した。できるだけ観客席の幅を広げて舞台を包み込むように近づけ、座席も列ごとにずらし、誰もが観やすくつくられている。客席との一体感が俳優の熱の入った演技を生み、観客を魅了し続けている。

雪国の冬の暮らしに 配慮した開放的な空間

プラザの東側は一階に「遅筆堂文庫」、二階に町立図書館が設けられている。伝統的な民家の屋根裏を思わせる大空間で、柱の存在感には落ち着きを感じる。南側が吹き抜けで開放感にあふれ、見上げると屋根裏の頂部が間接的な自然光で明るい。屋根の頂部に掛けられている「越し屋根」の窓が、排煙と光を採り込む役割を果たしているからだ。これらも雪に閉ざされる冬の暮らしを知っている建築家・本間利雄氏ならではの空間構成だ。建築全体を鉄筋コンクリート造の打ち放し仕上げとしなが



図書館スペース。1階は遅筆堂文庫、2階は町立図書館。民家の屋根裏を思わせるおおらかな吹き抜け空間。雪に閉ざされる冬季にも開放感をもたらす。



竣工当時の南側外観。建物の長さは127m。屋敷林をもつ民家の集落のイメージでデザインされている。冬に強い西風が吹くため、受け流すように、西側(写真左)に背の高い「劇場ホール」を配置して風を遮り、東側(写真右)のロビーと「図書館スペース」に向かって次第に小さく低くなっている。(撮影:木寺安彦)

ら、床や書棚などには木が使われ、あたたかな雰囲気をもたらしている。こうした空間を実際につくり上げるためにいかに力がそがれたか、町の企画課の遠藤勝則氏も、本間利雄氏も、施工会社の努力が大きかったと語る。

コンクリートの美しいシルエットをつくりあげた施工力

建物の施工は安藤建設(現・安藤ハザマ)・殖産工務所JVによって、一九九二年九月から九四年三月まで、一八カ月の工期で行われた。当時副所長を務め、現場を取り仕切ったのは大山弘好氏。高さのある劇場ホール側の躯体は五回の打継ぎ、文庫・図書館側は三回のコンクリートの打継ぎで建築された。「コンクリートは施工してみてもうまいかなかったから、やり直すというわけにはいかないんです。型枠の精度や、打設のときのコンクリートの品質、流動性などには気を使いました」と語る。真四角な箱をつくるならあまり手間はかからないが、平面から突出

施工者より

緊張の連続でしたが、全力で挑んだコンクリート工事でした



株式会社安藤・間
東北支店建築工務所 作業所長
大山弘好
Hiroyoshi Oyama

建物の施工期間の一八カ月のうち、一四カ月がコンクリートの基礎と躯体工事、緊張の連続でした。しっかりとした工事をするには全体を見る職員にも、職人さんにも経験が必要です。躯体の工事が始まって、優秀な型枠の職人さんが二〇人ほどいたんですけど、予測はしていたものの、それでは足りなくて、結局本社の協力を仰ぎ全国から集めました。型枠の精度には一番気を遣ったように思います。現場に型枠の準備をする場所がありすが、床にベニヤを敷いて、実際にスミを出して原寸で寸法を出していく現寸場をつくりました。寸法がわかりにくい箇所をミリ単位で出して、分業で加工していました。

本間先生の設計事務所のポリシーや、われわれの感じていることを盛り込んで全体の計画書を出していますので、細かい部分の施工まで信頼していただいていた。竣工したときには、終わったという満足感と、明日ようやく引き渡しができるといふ安堵感でいっぱいでした。その後は、コンクリートの躯体の鉄筋でも、型枠でも、他の人が携わる仕事にアドバイスができるようになりました。

先日、久しぶりにプラザへ行ってみると、二〇年経っているようには見えなくて、普段からよく使用され、メンテナンスされていることがわかり、施工に携わった者として大変うれしかったですね。

維持管理者より 時間をかけて地域を支える人が自ら育っていく場所になりたい



川西町フレンドリープラザ
川西町立図書館 遅筆堂文庫館長
阿部孝夫
Takao Abe

遅筆堂文庫の本は、量や種類もさることながら、井上ひさしさんを作家・劇作家として研究するときのたいへん貴重な資料でもあります。近年、研究者も増えていきます。井上さんが付箋を貼ったり、細かく書き込みをしたりしている本がたくさんあって、作品ごと、時代ごとにいろいろな資料が散逸しないで残されています。その時代に何を考えられていたか、その考えが作品にどのように表れていたかなど、多くのことが解読さ

れていくのはこれからです。亡くなってからも新刊が出たり、関係記事がメディアに載ったり、資料は増え続けています。本の整理もまだまだ続いているのです。

この地域に暮らしている人が、自ら自立して生きるためのヒントになるいろいろな種を、井上さんは蒔いていってくださいました。考えて、実践するのは自分たちです。それぞれの種をそれぞれの人が育てることが地域づくりに役に立っていくし、地域というのは人の集まりですから、人が育っていくことにつながっていくといいと思います。すぐに簡単に結果が出るものではなく、それは一〇〇年、二〇〇年先のこともしれません。プラザの建物を広場として、さまざまな交流が生まれる中で種を絶やさず、根付いていくように努力していきたい。その条件は揃っているので、必ず芽が出ると思います。



アプローチの「雁木(がんぎ)」。雨や雪を避ける役割を果たしながら、演劇などを見た後の余韻とともに帰路につく歩廊としてつくられた。

する部分がある場合は、型枠を増やさなければならぬ。たとえば、プラザの屋根の深い軒回りはすべて鉄筋コンクリート造だ。足場を組み、本体から出ている部分の鉄筋を組んで、軒の形状どおりに型枠を造り、取り付ける。一定の高さを保ちながら、全面的に支柱で支えていかなければならない。

腰回りの壁は水切りのように少し外に倒れている形状だった。「腰回りは型枠がうまく脱型できるのか、それから実際にどのように見えるのか、確かめるために実物大の模型をつくりました」。模

型とはいえ、幅二倍×高さ三倍で、本物の型枠でコンクリートを打つたというから念が入っている。「模型は最終の仕上げ段階で、吹き付け塗装のサンプルづくりに使ったので有効利用ができました」と大山氏。不安な部分を確認しておけば落ち着いて本番が打てるという。

コンクリートの打設も気を抜くことはできない。部位によって生コンをちやうどいい軟らかさに調整することが必要だという。室内の柱などを、きれいな肌仕上げるときは生コンが型枠内に十分に



遅筆堂文庫の閲覧カウンター。子供たちが窓際の落ち着いた席で勉強したり、本を読んだり。このスペースが気に入って通ってくる子供もいる。図書スペースの床や書架は木製の温かみをもつ材料が使われている。

行き渡るように、軟らかめの生コンを使う。「勾配がついた梁の施工は、生コンを少し硬くしないと流れていってしまうんです。流れたものをもう一度上げるのは不可能なので、取り返しがつきません」。現場の進行状況によって、軟らかさを変えるタイミングをプラント側とコミュニケーションを取ることが必要だ。一方で安全面では、工期の後半で冬季の作業に入ると、雪が屋根面を滑り落ちて、足場を倒してしまう恐れがでてきた。内側からワイヤーで引きつけるなど、万全の態勢がとられた。

このような関係者の努力が実り、一九九四年三月、遅筆堂文庫と町立図書館、劇場が一体となった「川西町フレンドリープラザ」が竣工。開館の翌年にBCS賞を受賞した。

井上ひさし氏は著書『本の運命』（一九九七年、文藝春秋社）の中で「みなさん、いらしたらびっくりしますよ。山形県の田んぼの真ん中に、劇場と図書館が一絡の和洋折衷の美しい建物がデーンと建っているんですから。第三六回

のBCS賞を贈られたすてきな建物です」と受賞の喜びを語っている。

次の時代につながる交流がプラザから生まれる

昨年、開館二〇周年を迎えたプラザで行われてきた主催・共催事業は演劇のほかに朗読、落語、講談に映画、クラシックからジャズ、タンゴ、邦楽といった音楽、読み聞かせ、写真展などじつに多彩。「イベントに携わったり、参加した人たちの交流が、さらにおもしろいものをつくりだしているんです」と阿部館長。

たとえば、置賜農業高校の演劇部は全国大会へ出場したこともある実力をもち、定期公演をホールで行っている。演劇、音楽などあらゆるものをプラザで体験し、感性の豊かな生徒たちの表現力のレベルが上がっているという。ポランティアで「こまつ座」公演の搬入や搬出などを手伝い、裏方の経験を積むなど、リアルな体験も生徒を育てる。

また、毎年開かれてきた「遅筆



古墳を借景にした野外ステージ。開館当初に薪能を行った様子が多くの人の記憶に残っている。

堂文庫・生活者大学校」は今年で二八回を迎えた。井上ひさし氏の意向で開校以来、農村と都市、文化、経済、教育や図書館、憲法とは何かといった時代を捉えたテーマが設定され、講師に招いた作家や識者の顔ぶれも斬新だ。参加者が問題意識を共有し、語り合うことを大切にしている。参加者は個人でやってきて、リピーターも多い。待ち望まれて誕生した川西町フレンドリープラザは、これからも人々が出会う大切な場所、さまざまな可能性を育てていく場所であり続けるに違いない。